令和６年度　墨田区立第三吾嬬小学校　学校経営計画・経営報告書（自己評価・学校関係者評価）

作成者　校長　川中子登志雄（代表）

学校教育目標	自立ー自ら学び、考え、行動する人　共生ー思いやりをもち、共に生きる人 健康ーしなやかで丈夫なこころとからだをもつ人
目指す学校像	「すべてはみんなの笑顔のために」 三吾小に集う子供、保護者・地域、そして教職員　すべての人の笑顔があふれる学校
目指す児童像	「学ぶ」ということを通して、思いやりの上に立つ真の教養と品格を身に付けようとする子供　そのために、主体的(Proactive)に生きる子供
目指す教師像	①教育への情熱と使命感にあふれる教師　②自らも学び、子供と共に感動できる教師　③社会人としての教養と品格のある教師

○令和6年度　学校経営計画における重点内容

教育目標「自立　自ら学び、考え、行動する人」を重点目標とし、全教育活動を通して児童の主体性を育成する。令和6年度は、特に「学習時間」の改革を通して、令和の日本型学校である「子供が『主語』になる学校」づくりを推進する。

・教師主導の一斉指導からの完全脱却を目指す。
・学校独自の学習過程を確立し、児童が進める「セルフ授業」や「単元内自由進度学習」を日常の「学習時間」とする。
・生活・総合的な学習の時間を使って「課題解決学習・探求学習（Project-based Learning）」に挑戦させる。
・学習時間の改善を中心とした学校改革により、一体的に特別支援・インクルーシブ教育を推進する。

項目	取組目標	具体的方策	取組指標		評価	成果指標		評価	分析	改善方策	学校関係者評価		
											自己評価	改善方策	意見等
児童の教育（人権尊重教育・各教科指導等・生活指導）	【人権尊重】 全教育活動を通して、「思いやりをもち、共に生きる人」となる資質・能力を育成する。	協働的な学びを日常化し、児童が主体となる学級づくりを推進することによって、いじめや不登校の起こりにくい、心理的安全性の高い集団づくりを、組織的に行う。	4 3 2 1	教アで90%以上の教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応したと回答 教アで80%以上の教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応したと回答 教アで70%以上の教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応したと回答 教アで教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応した教員が70%未満	4	4 3 2 1	認知したいじめ問題に100%対応、95%以上改善・停止 認知したいじめ問題に100%対応、90%以上改善・停止 認知したいじめ問題に100%対応、80%以上改善・停止 認知したいじめ問題に100%対応、改善。停止80%未満	4	「いじめ」についての捉え方をしっかりと確認していくこと。また、未然防止に向けて学年会、生活指導夕会などで情報を共有することで多くの目で児童を見ることができた。児童同士が話し合い、合意形成や意思決定を行う場面を学校全体で意識的に設けているが、まだ十分とは言えない。	児童が自分事として考えていける場面を意識的に増やしていく。トラブル等が起きた時に児童同士での合意形成や意思決定を行う場面をさらに増やしていけるよう定期的に研修会を実施する。	A	B	改善方法については全て賛成です。とても分かりやすいです。 トラブルを起こしがちな児童をフォローしていくことが大事だと思います。
	【特別支援・インクルーシブ教育】 個別最適な学びを保証し、個に応じた支援の一層の充実を図る。	個々の担任や学年だけに責任を負わせることのないよう、特別支援部を中心に、関係諸機関と連携し、組織的に特別な配慮を要する児童（とその家庭）の支援にあたる。そのために「まなびの教室」との連携、学習室「みどり」の活用を推進する。	4 3 2 1	教アで95%以上の教員が組織的に特別な配慮を要する児童（とその家庭）の支援にあたったと回答 教アで90%以上の教員が組織的に特別な配慮を要する児童（とその家庭）の支援にあたったと回答 教アで80%以上の教員が組織的に特別な配慮を要する児童（とその家庭）の支援にあたったと回答 教アで組織的に特別な配慮を要する児童（とその家庭）の支援にあたったと回答教員が80%未満	4	4 3 2 1	不登校出現率7%以内かつ学校との接点維持98%以上 不登校出現率8%以内かつ学校との接点維持98%以上 不登校出現率9%以内かつ学校との接点維持98%以上 不登校出現率10%以上または学校との接点維持98%未満	4	学習支援員やSCに積極的に声をかけ見てもらえるようになり、「まなび」につながる児童もいた。個々の児童にあった場での生きにくさを克服できる機会が増えてきている。また、「みどり」を活用することにより、前向きに学校生活を行える児童が増えた。	「みどり」の活用により、分かってきた改善策を明確にし、多くの児童が必要な時に活用できるようにしていく。特別に配慮する必要がある児童も増えてきているので、個々の児童の特性に合わせた学習が行えるようにしていく。	A	A	不登校になる児童の心の支えになればと思います。
	【児童の主体性の育成】 児童が将来自らウェル・ビーイングを獲得できるようにするため、「自ら学び、考え、行動する」主体的な態度を身に付け、自己肯定感を高める。	年間専属講師の指導を受け、「児童の主体性の育成」をテーマに研究を行い、教師主導の一斉指導からの脱却を図り、児童が主体となる「学習時間」を創出する。	4 3 2 1	教アで90%以上の教員が当事者意識をもって研究に取り組んだと回答 教アで80%以上の教員が当事者意識をもって研究に取り組んだと回答 教アで70%以上の教員が当事者意識をもって研究に取り組んだと回答 教アで当事者意識をもって研究に取り組んだと回答した教員が70%未満	4	4 3 2 1	児童アで「めあてに向けて自分たちで考えて学習することができた」に85%以上回答 児童アで「めあてに向けて自分たちで考えて学習することができた」に80%以上回答 児童アで「めあてに向けて自分たちで考えて学習することができた」に75%以上回答 児童アで「めあてに向けて自分たちで考えて学習することができた」に75%以上未満	4	「学習リーダー」を中心に学習を進める時間が増えてきている。学習への取り組みも主体的に取り組める児童も多くみられるようになってきた。まだ、手探りの部分も多いので、疑問点を解決しながら学習時間を創出していく。	「学習リーダー」を活用する等、学習時間の進め方を共有し、各学級で取り組んでいく。児童がより主体的になる学習時間にするために、教員の役割を明確化し、全員で実践していく。「ファシリテーター」「見取りと評価」「結果に対しての責任」をキーワードに研究を進めていく。	B	B	少しでも多くの子、できれば全員が活躍できるようにしてほしいです。素晴らしい取組だと思います。
		異学年交流による「遊び」の時間を週時程に位置づけ、児童同士が「遊び」を通して主体性や社会的スキルを高めることのできる時間を保証する。教員は、できる限り「子供に任せる」ようにする。	4 3 2 1	教アで80%以上の教員が「子供に任せることができた」と回答 教アで70%以上の教員が「子供に任せることができた」と回答 教アで60%以上の教員が「子供に任せることができた」と回答 教ア「子供に任せることができた」と回答した教員が60%未満	4	4 3 2 1	児童アで「縦割り班活動で異学年と楽しく『遊ぶ』ことができた」に85%以上が肯定的回答 児童アで「縦割り班活動で異学年と楽しく『遊ぶ』ことができた」に80%以上が肯定的回答 児童アで「縦割り班活動で異学年と楽しく『遊ぶ』ことができた」に70%以上が肯定的回答 児童アで「縦割り班活動で異学年と楽しく『遊ぶ』ことができた」と肯定的回答が70%未満	4	子供に任せる形で「縦割り班遊び」をスタートしたことにより、会を重ねるごとに進め方の進歩があった。中休みの活動のため、全員が集まるのに時間がかかる班もあり、十分な活動ができないこともあった。また、縦割り班の意義を理解できていない児童・教員がいた。	教員・児童に縦割りの意義を理解できるようにする。そのために縦割りの時間を長めに設定する日を設け、児童との振り返りの時間をとったり、土曜公開等でロングの縦割り班活動の時間を作ったりしていく。	A	A	縦割りの役割・意義を理解させていくとよい。休み時間の利用はよい。素晴らしい取組だと思います。あまり無理のないようにしてほしい。
	【学力の向上】 1 主体的・対話的で深い学びを実現させるために、これまでの指導法を見直し、児童主体の学習時間を創出する。 2 主体的な家庭学習の習慣を身に付けさせる。 3 児童の自己肯定感を高めるための評価の在り方について研究する。	7月までに学校としての学習過程スタンダードを確立し、児童が自ら学習を進める「学習時間」を日常化する。後期からは、単元内自由進度学習やPBL(探求・課題解決学習)に挑戦する。	4 3 2 1	7月までにスタンダード確立。後期からPBL等に挑戦できた 9月までにスタンダード確立。後期からPBL等に挑戦できた 10月までにスタンダード確立。後期からPBL等に挑戦できた スタンダードを確立できなかった。PBL等に挑戦できなかった。	2	4 3 2 1	児童アで「自分たちで学習を進められるようになった」に80%以上回答 児童アで「自分たちで学習を進められるようになった」に70%以上回答 児童アで「自分たちで学習を進められるようになった」に60%以上回答 児童アで「自分たちで学習を進められるようになった」に60%以上未満	4	学習過程スタンダードは学力向上、研究部が中心となり確立することができた。後期目標の自由進度やPBLへの取り組み（挑戦）状況には、学年によってバラつきがある。	校内研究の一環として、他学年他学級の学習の様子を見れる環境を整えていく。また学校経営についての意見や情報交換の場を年に５回以上設定する。	B	B	アンケートで約半数が肯定的な回答だが、保護者は不安を感じているように見える。児童と保護者の意識差が気になる。更に推進していただきたい。
		６月までに、学力向上部を中心に、従来型の宿題に代わる家庭学習の在り方について、「新・家庭学習の手引き」としてまとめ、「学び方」を指導する。	4 3 2 1	6月までに作成し、指導を開始した。 7月までに作成し、指導を開始した。 9月までに作成し、指導を開始した。 前期中に作成できなかった。	2	4 3 2 1	児童アで「自分で考えて家で学習することができた」に80%以上回答 児童アで「自分で考えて家で学習することができた」に70%以上回答 児童アで「自分で考えて家で学習することができた」に60%以上回答 児童アで「自分で考えて家で学習することができた」に60%以上未満	3	９月から家庭学習について指導を行うこととなった。共通理解を図ること話し合いが不十分であった。	年度初めに、学校改革について共通理解を図る時間を設け学年で計画を立てる。毎月学力向上部が学校全体の取組状況の確認、課題把握に努める。	B	A	アンケートで約半数が肯定的な回答だが、不安に思う家庭はある気がする。課題の出し方を工夫しながら、教員・保護者の共通理解が重要である。
		評価検討プロジェクトチームを発足し、形成的評価を充実させ、10月までに通知表に代わる総括的評価として活用するための仕組み作りを行う。12月までに保護者に説明を行い、R7年度より通知表の全面改定を行う。	4 3 2 1	10月までに仕組みを作り上げることができた。 11月までに仕組みを作り上げることができた。 12月までに仕組みを作り上げることができた。 1月までに仕組みを作り上げることができなかった。	2	4 3 2 1	保アで「子供が学校で成長した内容が伝わっている」に80%以上回答 保アで「子供が学校で成長した内容が伝わっている」に75%以上回答 保アで「子供が学校で成長した内容が伝わっている」に70%以上回答 保アで「子供が学校で成長した内容が伝わっている」に70%以上未満	2	前期より通知表に替わるOPPシートを活用した学習を進めてきた。全クラス統一して活用していないことがこの数値となった。	シートを活用し自己肯定感を高める。来年度に向け、ポートフォリオを活用するか検討し、校内の評価基準を明確にする。学校便りや３月の保護者会で来年度の学校改革について説明し理解と協力を求める。	B	B	どんな通知表になるのか、想像もつかないため、保護者間で理解のずれがある。学校がしつこく説明していただけると良い。三吾小のやり方が墨田区全体に広がらないと支持されない。

項目	取組目標	具体的方策	取組指標		評価	成果指標		評価	分析	改善方策	学校関係者評価		
											自己評価	改善方策	意見等
家庭・地域連携	【地域と協働した子育て】 地域の教育財産を生かし、地域から学ぶ機会を教育活動に位置づける。 地域を愛し、誇りに思う児童の心情を育てる。	年間を通して、ゲスト・ティーチャーによる体験的な学習の充実を図る。9月のキャリア教育特別授業等、各学年・年3回以上の特別授業の実施を目指す。	4	ゲストティーチャーを活用した授業を年間で3回以上実施、全体で20回以上実施	4	4	児童アで90%以上が「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」と回答	4	年度当初より各学年が計画的にゲストティーチャーを活用する話し合いを行っていたこと、前年度からの引継ぎがしっかりとなされていたことが結果に現れた。全校29回実施。	来年度も地域社会とのつながりを大切にする総合的な学習・生活科や社会科の学習を、計画的に企画する等、地域に根付いた学校づくりを実現していく。	A	A	協力してくださる保護者や地域の方々には本当に感謝をしております。
			3	ゲストティーチャーを活用した授業を年間で3回実施、全体で18回以上実施		3	児童アで80%以上が「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」と回答						
			2	ゲストティーチャーを活用した授業を年間で2回以上実施、全体で15回以上実施		2	児童アで70%以上が「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」と回答						
			1	ゲストティーチャーを活用した授業を年間で2回未満実施、全体で12回未満実施		1	児童アで「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」の回答が70%未満						
	【開かれた学校】 積極的に教育活動の情報発信を行い、保護者・地域の学校教育への理解を深め、教育活動への参画を促す。	HP、学校便り、学校公開、動画通信、校長「語らいサロン」等と通して、学校の教育活動を発信するとともに、各種アンケート等を実施し保護者・地域の願いやニーズを把握する。	4	保アで90%以上が「学校は積極的に情報を発信している」と回答	4	4	保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答90%以上	3	学校改革、教育活動では、ノーチャイム、「宿題」の廃止を行った。これらについて様々な情報ツールを定期的に発信し続けたことにより、この肯定的な結果となった。土曜学校公開の減少により保護者が直接様子を見る機会が減少してしまった。	来年度、通知表に替わる面談により評価を伝えていく。本年度同様に、繰り返し丁寧に説明すること、情報を発信する。来年度は、一人一人と面談を行い、直接学期末の評価を伝える時間を確保する。	B	A	土曜授業が減り、仕方のない部分はありますが、語らいサロンが減ったのは残念です。校長動画は引き続きお願いしたい。地域への情報発信を積極的に行い、理解を高めてほしい。
			3	保アで85%以上が「学校は積極的に情報を発信している」と回答		3	保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答80%以上						
			2	保アで80%以上が「学校は積極的に情報を発信している」と回答		2	保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答70%以上						
			1	保アで「学校は積極的に情報を発信している」と回答とした保護者が80%未満		1	保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答70%未満						
	【コミュニティー・スクール】 墨田区教育委員会と連携し、学校の経営母体をコミュニティー・スクール化する。	6月までに情報収集を行い、現在の学校運営連絡協議会に説明を行う。11月までに人選を行い、新たな組織を立ち上げるための準備をする。	4	10月までに組織を立ち上げることができた。	4	4	学運協アンケートCSについて十分に理解した80%以上	4	教育委員会の協力を得て、新たに学校運営協議会を発足することができた。２／６に２回目を実施。	協議会の運営等について、地域学校支援部の設立について等、今後も地域と協議しながら進めていく。	A	A	毎回参加しているが学校運営のお役に立てているのか自信はありません。 三吾嬬小学校が進みすぎていて、逆に地域の方々に理解をしてもらえないように感じています。
			3	11月までに組織を立ち上げることができた。		3	学運協アンケートCSについて十分に理解した70%以上						
			2	12月までに組織を立ち上げることができた。		2	学運協アンケートCSについて十分に理解した60%以上						
			1	1月までに組織を立ち上げることができなかった。		1	学運協アンケートCSについて十分に理解した60%未満						
学校の管理運営・教職員	【教職員の資質・能力の向上、服務の厳正】 校内研究を通して、令和の日本型学校教育を支える教職員の資質・能力を育成する。	・服務事故防止研修会を毎月実施し、服務事故を起こさない、起こさせない教職員集団の気運を醸成する。 ・朝礼講話、INAHOによる資質向上研修を実施する。	4	教アで90%以上の教員が当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答	4	4	事故件数０、保アで教職員の信頼度90%以上	3	服務事故防止研修を実施、スローガンを作成させた。これにより常に服務事故につながる原因が身近にあることを理解させることができた。	教職員間で互いにチェックし、服務事故を未然に防ぐ体制を維持していく。令和の日本型学校教育を実現するために、来年度、対話的な研修を計画し実施する。	A	A	教職員の評価が妥当か分かりにくく、頑張っている教職員の評価を保護者にうまくつなげるシステムがあれば、学校への信頼向上のための学校評価ができる。
			3	教アで85%以上の教員が当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答		3	事故件数０、保アで教職員の信頼度85%以上						
			2	教アで80%以上の教員が当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答		2	事故件数０、保アで教職員の信頼度80%以上						
			1	教アで当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答した教員が80%未満		1	服務事故発生、または保アで教職員の信頼度80%未満						
	【適切な学校評価】 組織的・計画的な「学校評価」を実施し、経営改善を図る。	５月より学校経営計画・経営報告書の作成を組織的に行い、教職員の学校経営参画を促すと同時に、児童、保護者・地域の願いやニーズを踏まえた経営改善を図る。2月中にR7年度に向けた改善案を示す。	4	教アで95%以上の教員が学校経営計画の目標実現のために努力をしたと回答	4	4	保アで「子供を入学させて良かった」に肯定的回答90%以上	3	概ね達成できた。学校経営方針を共有・理解するために、教員間で対話を重ねてきたが、まだ十分とは言えない。	今後も目標を達成するために、期日を設定し、具体的に取組方法を共有する。合意形成の場を設定する。	B	B	新しい指導方針等に対応されるのは、大変かと思いました。
			3	教アで90%以上の教員が学校経営計画の目標実現のために努力をしたと回答		3	保アで「子供を入学させて良かった」に肯定的回答85%以上						
			2	教アで80%以上の教員が学校経営計画の目標実現のために努力をしたと回答		2	保アで「子供を入学させて良かった」に肯定的回答85%以上						
			1	教アで学校経営計画の目標実現のために努力をしたと回答した教員が80%未満		1	保アで「子供を入学させて良かった」の回答85%未満						
	【教職員の働き方改革】 学校改革を一体的に推進し、教職員の過重労働を解消する。	研究を中心に学校改革を推進し、一体的に教職員の働き方を改善する。週あたり在勤時間50時間超の教職員を20%以下に抑え、教職員に年6日以上の「充電休暇」を取得できる環境を整える。	4	教アで90%以上の教員が目標を達成したと回答	2	4	R6ストレスチェック総合健康リスク100%未満	1	平日休暇取得に対して消極的である。休暇を取るための準備や引継ぎを大変だと思っている。児童を信用して任せることができない。学校改革の途上にあり学習リーダーが育っていない。50時間57.5%で、昨年度よりも減少し意識は高まっている。リスクは108%と同業種の平均よりかなり高い数値であった。	研究を中心とした一体的な学校改革が実現できれば、働き方も変わり、充電休暇を取得しても学習を進めていくことができる。業務の細分化し、役職に応じた働き方を行う。	B	B	遅くまで残っている先生には感謝しかありませんが、もう少し早く帰れる職場だとよい。校長先生の意識改革で、改善されているように考える。休暇全消化を目指してほしいが、働き方改革をうまく利用して地域とのコミュニケーションが不足しているように思えてならない。
			3	教アで80%以上の教員が目標を達成したと回答		3	R6ストレスチェック総合健康リスク100%						
			2	教アで70%以上の教員が目標を達成したと回答		2	R6ストレスチェック総合健康リスク102%						
			1	教アで目標を達成したと回答した教員が70%未満		1	R6ストレスチェック総合健康リスク104%以上						

○令和６年度　学校経営報告のまとめ（総括）

「子供が主語になる学校づくり」は、児童の姿に徐々に成果が出始めているところではあるが、保護者や教職員に、前例のない取組に対する不安が強まっている。これまでの常識を覆すためには、保護者のみならず、まずは教職員の意識改革が欠かせない。校長の示す「目標」を深く理解するために、教職員が日常的に対話をし、合意形成を図る必要がある。学校の抱える様々な問題を一体的に解決するという方向性は、時代の求めるものであることを信じて、さらにこの改革を推進していきたい。